The Japan Society of Educational Sociology

園生活において幼児が用いるリズミカルな表現

青井倫子（愛媛大学）

問題意識と目的

発表者はこれまで、幼稚園や保育所などの自由遊びの時間に、幼児たちが遊び集団を形成し、それを維持する過程において、どのように集団調節を行っているのかについて検討を行ってきた。遊び集団の調節過程を分析するうえでは、進行中の友だちの遊びに途中から参入が試みられる「仲間入り」の場面が非常に有効であった。この、友だちの遊びへの「仲間入り」の際に、幼児たちは「入れて」という表現をしばしば用いるが、この言葉は、「話し言葉」として用いられる場合と、独特のリズムと音調を付して「リズミカル」に表現される場合とがある。幼児たちは、これらの表現を、場面に応じて微妙に使い分けているように思われる。

ところで、子どもたちの生活のなかには、こうした独特のリズムと音調を与えられているリズミカルな表現が多く存在する。幼児は生活のなかで、「でたらめうた」のように即興的にリズミカルな表現を創り出すことも多いが、たとえば「○○ちゃん、遊びましょ♪」－「はーい、ちょっと待ってね♪」など遊びの誘いに行った場合の玄関先でのやりとりや、「おまえのかあさん、でーべーそ♪」と言った応酬・からかいの表現など、子どもたちの間で共有されているものもさまざまある。

このようなリズミカルな表現は、近年、遊びの減少とともに子どもたちの生活のなかから減少しつつあるようにも思われるが、一方、幼稚園や保育所などの園生活のなかでは、保育者や幼児たちは、話す行為と歌う行為を結び付け、あらゆる場面でリズミカルな表現を用いている。

本研究においては、幼稚園や保育所の生活のなかで用いられるリズミカルな表現のうち、特に「話し言葉」と「歌」との中間形式としての「リズミカルな言葉」に着目する。このような表現は、音楽的な表現でありながらも、いわゆる「歌」とは異なり、行為者自身に歌唱としての自覚はない。それでいて、これらは、単に字義上の意味伝達の目的を持つ「話し言葉」としてではなく、リズムや音調を付されることによって、日常会話とは異なる響きを与えられて発せられている。本研究では、保育者と幼児、あるいは幼児同士のやりとりにおいて、このような中間形式としてのリズミカルな表現がどのように用いられているのかの検討を通して、リズミカルな表現が、園という集団保育の場においてどのような意味を持ち、どのような機能を果たしているのかを考察する。

方　法

観察対象：広島市内の公立W保育園の幼児（3歳児3クラス、4歳児2クラス、5歳児2クラス）と保育者。

観察場面：登園後の好きな遊びの時間、及び、お集りや給食などの一斉活動場面。

観察方法：周辺的・半参与的観察方法。

記録方法：ビデオカメラによる録画および状況の補助的記述。

分析事例：幼児あるいは保育者によって、「話し言葉」と「歌」の中間形式として「リズミカルな表現」が用いられた事例、及び、リズミカルに表現される言葉と同様の言葉が「話し言葉」の形式で用いられた事例。

・それぞれの事例について、前後の文脈や状況説明の補足を行いながら文字化。

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

結果と考察

園生活のなかで保育者や幼児が用いる音楽的表現のうち歌唱的な表現は、大別すると、いわゆる「歌」（遊び歌、既成の歌、それらの替え歌、即興歌など）と、話し言葉に独特のリズムと音調を付した、歌と話し言葉の中間形式としての「リズミカルな表現」とに分けられる。

保育者は、クラスや園の幼児全体を対象とした一斉活動の場面において幼児に呼びかけたり語りかける場合に、リズミカルな表現を頻繁に用いる。リズミカルに表現することで自然に子どもたちが同期してくるため、話し言葉で伝達するのとは異なり、一方的、明示的な指示・命令と感じられにくく、子どもの自発性を特に尊重しようとする幼児保育の場にあいやすいという理由によると思われる。

保育者が用いるリズミカルな表現の多くは、集合時の「ふじ組さん♪」－「はーい♪」といった「お名前呼び」や、「ご一緒に♪」－「いただきます♪」のように、全員の声が揃うまで何度も、また毎日の日課のなかで繰り返し行われるものが多くある。その繰り返しのなかで、幼児たちは呼吸をあわせタイミングよく呼応することを学習すると同時に、同じ表現形式に従って音楽的なやりとりをする協同と感覚運動レベルでの共感から、時間と場面が共有され気持ちが融合していくこと－集団との一体感、仲間との連帯感－を経験する。

このようなリズミカルな表現は、いわゆる歌とは異なり、特定の活動や場面に固有に用いられている。自由遊びの場面においては、「入れて♪」「替ーわって♪」－「いいよ♪」などのリズミカルな表現が幼児たちに教示される。それらは、何らかの言語的な意味の伝達を意図されながらも、リズミカルに表現される（始まりと終わりの存在）ことで、意識的に日常会話としての自由な応答形式を断った、あるパターン化された形式が与えられ、園生活におけるリチュアルな表現として定式化されている。保育者は、園という多くの幼児が存在する集団保育の場のなかのある特定の場面で交わされるおきまりのやりとりに、独特のリズムと音調を付けリズミカルに表現することで、全体活動が円滑にすすんだり、幼児の仲間とのかかわりが親密になったり拡大していくような、一つの完結した呼応形式を幼児に提示している。

一方、幼児はリズミカルな表現の持つ、言語の明確化、定式化された呼応＝多様なやりとりに拡大する可能性（日常会話の形式）の遮断、相手とのあいだに生じる仲間意識や気持ちの交流など、リズミカルな表現の持つ機能を利用しながら、保育者や仲間との関係を調節している。たとえば、自由遊び場面における「仲間入り」や「物の貸し借り」などいざこざの生じやすい場面での、「入れて♪」「替ーわって♪」などの表現は、保育者によって呼応形式が定式化されており、また、言葉に「歌」の要素が付加されていることで相手とのあいだに和やかな雰囲気が形成されやすい。そのため、直接「話し言葉」で交渉するよりも受容される可能性が高いという期待がある。親密な仲間集団が形成されつつある年長児においては、親しい関係にない友だちとの交渉で、このようなリチュアルでリズミカルな表現が用いられる傾向がみられる。

また、幼児たちは、相手の申し出を拒否する場合の「だめよ♪」や、遊びから抜ける時の「やーめた♪」のように仲間関係を閉じる際にもリズミカルに表現したり、非難、応酬、からかいなどのはやし言葉をリズミカルに唱えたりする。こうした表現を用いることで、非難や拒否の緊張が緩和されると同時に、言語的やりとりの拡大が避けられたり、ゆるやかな共感関係が保留され、いざこざの拡大や仲間関係の断絶が回避される。

［結果・考察の詳細、事例は当日資料を配布予定］

NII-Electronic Library Service